

2012

「わくわく体験」 (春夏版)



実施報告書

NPO エスエスピー  
代表 森屋 進

2012/08/31

## 事業の目的

八代地域の高齢化率は、中山間地域が非常に高く坂本町は、熊本県第一の高齢過疎化地域です。このままでは、町自体の維持が困難なる状況は近い将来訪れてきます。

坂本町の人口は、昭和40年代を境に減少の傾向をたどりピーク時の人口18,000人から現在は、4,550人となり高齢化率は44.8%に達しています。特に中津道地域の一部地区は、90%を超え全体75地区内27地区が限界集落とされる地域です。中には、バス路線がない（交通空白地域）地区も多く、日常生活に支障をきたしています。

以前は8校あった小学校も1校となり、小学校を中心に築き上げてきた地域コミュニティ組織も崩壊し、地域自治の活動にも限界が出始めています。

当該事業は、坂本町の高齢者を中核構成員となし地域の歴史、自然、文化、風俗等の地域固有資源を発掘し、地域再生の創造をイメージし地域独自の商品開発や、振興企画、イベント企画を行い高齢者が「生き生きとした職場の創造」をテーマに活動することが地域再生の手法であり、この取り組みが次世代へと繋がり、新たな雇用の現場、新たな地域の創造を創出できる組織を構築したいと思っています。

## 事業の内容

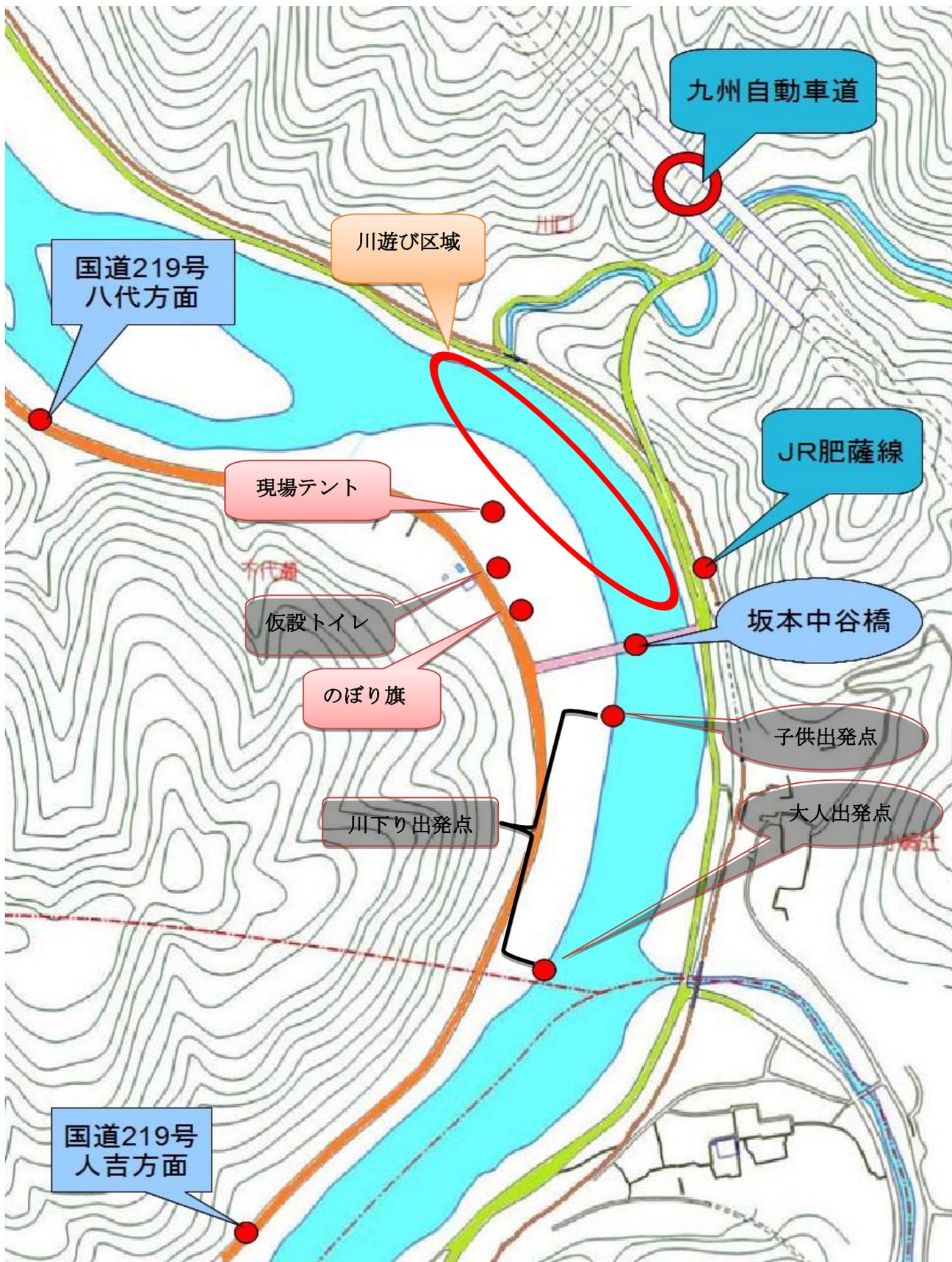
今回の「わくわく体験」事業は、タイヤチューブを使った球磨川下りで、球磨川の素晴らしい自然を五感で体験、満喫していただくものです。

事業実施に当たっては、国土交通省の協力による参加者への安全講習を行い、川下り中は、参加者を徹底的に見守り、危険区域への立ち入り規制、回避等を通じて、事故が起らないようにしました。

## わくわく体験プラン企画概要

企画	釣舟・民宿 森屋 九州ムラ旅応援団
誘客	J R九州
水難事故防止	国土交通省八代工事事務所
実施	N P O エスエスピー
送迎昼食提供	坂本温泉センター クレオン
実施場所	坂本町中谷橋周辺

事業実施図（現場図）



# 実施内容

## 体験メニュー

・川遊び区域内

### 1・保安具の着用（ライフジャケット）

ライフジャケットの着用は、自分の命を守るために必要です。（フィッティング）  
しっかりと着用できるように国交省のレクチャーを基に指導実施しました。



保安具は、正しく装着  
しましょう。



国交省



小さい子供たちには、スタッフみずからフィッティングを行い装着の安全確認を実施しました。

### 2・準備運動

事故防止のはじめは  
準備運動から



国交省



### 3・救助のレクチャー

不安がる子供たちを球磨川になじませる為とスタッフとのコミュニケーションを円滑に行うためのファーストコンタクトとして取り入れました。



#### フローティングスタイル

流されても慌てず、流れに逆らわず身を任せ救助を要請するスタイル

小さい子供でも数分でこのスタイルをとることが出来ました。



#### 救助ロープの投入

うまく救護者に投げることが出来るか、親子ペアになり交互に行いました。

写真は、子供がお父さんを救助している模様です。



#### 救護姿勢

救護ロープをつかむ人は、仰向けになりロープより自分が下流側になるようにロープをつかみます。又、可能であればバッグを股に挟むと腕への負担を減らすことが出来ます。

左の写真は、お父さんが模範姿勢を取って子供に救助されている様子です。

#### 基本動作に勝るものなし

ここまでの体験メニューは、事前に国土交通省の水難事故防止安全講習会をスタッフ全員で受け体験者とのコミュニケーションをとるために事前準備を重ね検討実施したものです。

当該事業が無事故で終わることが出来たのもこの取組みを真剣に検討実施したおかげだと考えられます。



#### 4・其の他の体験メニュー

##### イカダ渡り



川岸とイカダの間を一本の竹でつなぎ、その上を子供たちが渡りました。

この体験メニューは、一人のスタッフが現場で思いつき実施したイレギュラーのメニューです。

単純な事ですけど子供たちは、真剣に取り組み楽しく遊びました。

唯一、体験期間中に渡りきった子供が右の写真の子供でした。

彼は、この体験達成後子供たちの祝福を受けヒーローになりました。

大きい子供が体験を行うと小さい子供もこぞって負けずにがんばりました。



小さい子供たちは、左の写真のようにスタッフが補助してあげて体験を行いました。

## 5・休憩

子供たちは、体験に夢中になり体力の消耗に気づきません。私たちスタッフは、そのことを踏まえ総隊長（木本氏）の号令のもと体験中止、休憩の時間を取りました。

休憩の目的は、低下した体温の上昇と水分補給を行い体験者の体力を回復させる目的でもあります。

しかし、盛り上がった子供たちの行動を妨げることは出来ない為に、川に入らなくても出来る体験メニューを取り入れました。

### 水切り



小石を投げ、水面を何回小石が跳ねるか競う昔ながらの遊びです。

子供たちは、やったことが無いのか上手く出来る子供はいませんでした。

大人の人でも出来る人は数えるだけでスタッフに手取り足取りコツを習う人がいました。



### 水鉄砲



体験現場整地の際、切り出した竹を利用して作りました。

子供たちは、見るのも使うのも初めてらしく興味深々で喜んでいました。最後は、お土産としてプレゼントしました。



ここまでの体験メニューを午前中に行いました。

## 6・川下り

昼食後、当該事業のメインイベントである川下りです。  
出発点への移動は、イカダを使いタイヤチューブを載せて移動しました。



このイカダも整地作業の際、切り出した竹を組んで体験メニューに加えました。



このイカダの最大許容荷重は、約300キロぐらいです。大人が5人も乗ると前に進むことが出来ませんでした。

この事は、来年度の課題としてとらえ今年度、浮力の検討と安定度の向上を図るための実施試験を行います。



## 7・川下り

川下りを行う前にタイヤチューブでの姿勢を確認し、転倒した場合どのような行動をとれば良いか事前にレクチャーを行い安全、安心な体験メニューの実施に心がけました。



### 川下り（子供出発点）

小さい子供たちにも球磨川の自然とスリルを体験してもらう為に、私たちスタッフは、試行錯誤の中、安全を第一の考え実施しました。



小さい子供は、タイヤチューブの上で方向を変えたり、安定姿勢をとることは難しいと判断しタイヤチューブに救助ロープを装着して実施しました。（名付けてヨーヨー作戦）

救助ロープ20m分を下らせロープを巻き上げ出発点に戻す。このヨーヨー作戦を体験した子供たちは下りは川の力、上りはスタッフの力をかり川下を楽しみました。

### 川下り（大人出発点）

大人の体験には、少しスリルを味わうことが出来る上流で実施しました。事前にスタッフが何回も体験を実施し川の特長や流れの状況を把握し出発点において体験者へのレクチャーを徹底しました。



体験する視線が水面と変わらない為、より以上の体験を味わうことが出来ます。右の写真の人は、姿勢を崩し横転しましたが自力で再浮上し体験を行いました。この事は、私たちスタッフが事前に水難事故防止講習会に参加しミーティングを重ね実施できた成果だと思います。

この体験プランに協力していただいた国交省の皆さんに感謝します。

球磨川の自然に抱かれ身を任せ、明日への活力を見出す体験は、ここでしか味わう事が出来ません。



体験者の皆さんは、午前中のレクチャー指導を良く守り球磨川の自然を五感で体験された事と思います。

体験の臨場感は、写真で伝えきれない部分が多くありますが、上記写真の体験者は、合計4回出発点に戻り時間一杯まで球磨川を堪能されました。

体験期間中、事故もなく終えたことは大きな成果でした。これはスタッフ全員が安全に対する意識が高く事前協議が密に行ったことから生まれた事であると思います。

今回の成果に驕ること無く、気を引き締め体験プランの充実を図り地域観光のはじめの一歩として今後も取り組んでいきたいと思ひます。

私たちスタッフ一同より良いおもてなしのプランを体験者の皆さんに安全に提供できるよう今後も努力いたします。

NPO エスエスピー

代表 **森屋 進**